

葛飾北斎の山地描写と近世後期の山地荒廃状況

名古屋大学・生命農学 ○田中 隆文
中村 久美子

1. はじめに

何十年、何百年という無災害期間を経て突然、土砂災害が発生することは少なくない。過去何百年も遡及した災害情報は一般的には未整理であり、そのため発生しうる土砂災害の特性についても住民の警戒避難に対する意識という点でも有効な情報の不足は否めない。しかし長期の土砂動態を連続的に網羅し、過去から未来に至る災害の危険性を時系列で検討した研究は少ない。筆者ら（投稿中）は、古文書の記録に基づき木曾川水系中津川を対象に江戸時代から現代までの過去 406 年間の土砂災害・洪水災害の発生状況を時系列的に明らかにしたが、同研究は古文書資料が特に充実した地区での事例であった。様々な地域の過去の山地荒廃状況を示唆する資料の開拓が望まれる。

最近、田中淳夫（2008）や太田猛彦（2008）は江戸時代の絵画資料から当時の山地荒廃状況を把握することに成功している。では多作でジャンルや流派を超えた葛飾北斎の絵画は、山地荒廃状況の資料として用いうるのだろうか？本研究では、北斎の富嶽三十六景について検討した。

2. 問題点の絞込み

古代より森林搾取による山地の荒廃は進行し、わが国では近世後期から近代初期において最も激しく、国土面積の 2 割程度を占めた（太田，2001）。淀川上流の田上山や尾張の瀬戸市周辺などの当時の広大な「はげ山」の写真は教科書などにもよく掲載されるが、千葉（1973）が指摘するように「はげ山」は花崗岩地帯に集中的に分布しており、東海・近畿・中国地方で特に顕著だったという。しかし、江戸後期に描かれた絵画には東日本の山々についても「はげ山」のようにもみえる表現が使用されている。

一方、ケネス・クラーク（佐々木訳，2007）は風景画がしばしば記号や図像や想像により描かれることを指摘し西洋の中世においては写実性の高い風景画はほとんど例がないことを指摘している。近世の日本絵画においても例えば渡辺始興の「吉野山図屏風」のように樹木などは記号化（含：簡略化・象徴化・景物化）されて描かれることが多く、水墨画における「芥子園画傳」などの絵手本の使用も記号化を招くこととなった。絵画における山腹植生の記号化（含：簡略化・象徴化・景物化）は、植生の形態や疎密の情報を損なうばかりでなく、記号と記号の間の「地」の部分が、記号で表される植生で一面覆われているのか、あるいは覆われていない部分なのかの判別を不可能とする問題も生じる。このように、絵画資料から写実的な情報を読み取るためには、まず当該資料における記号化の程度と特徴を吟味する必要がある。

そこで本報告では、葛飾北斎が晩年に描いた「富嶽三十六景」を対象とし、特に山肌の表現の写実性について解析し、「はげ山」のように描かれた山地が荒廃状況を表現したものなのかどうかを検討した。「富嶽三十六景」を対象とした理由は、1)北斎は、ジャンルや流派に制約されずに表現していること、2)北斎は「北斎漫画」などの絵手本を出版し、対比が可能であること、3)視点の位置は、一部を除きほぼ判明していること、4)「富士を気象・季節・視点など様々な条件下でとらえ、そのつどの異なる山容の表情に最大の興味」で描写し（永田，2000）、空想や心象で描いたものではないこと、5)富士山周辺に限られ、他の画家・作品との対比も可能であることが挙げられる。

3. 研究方法

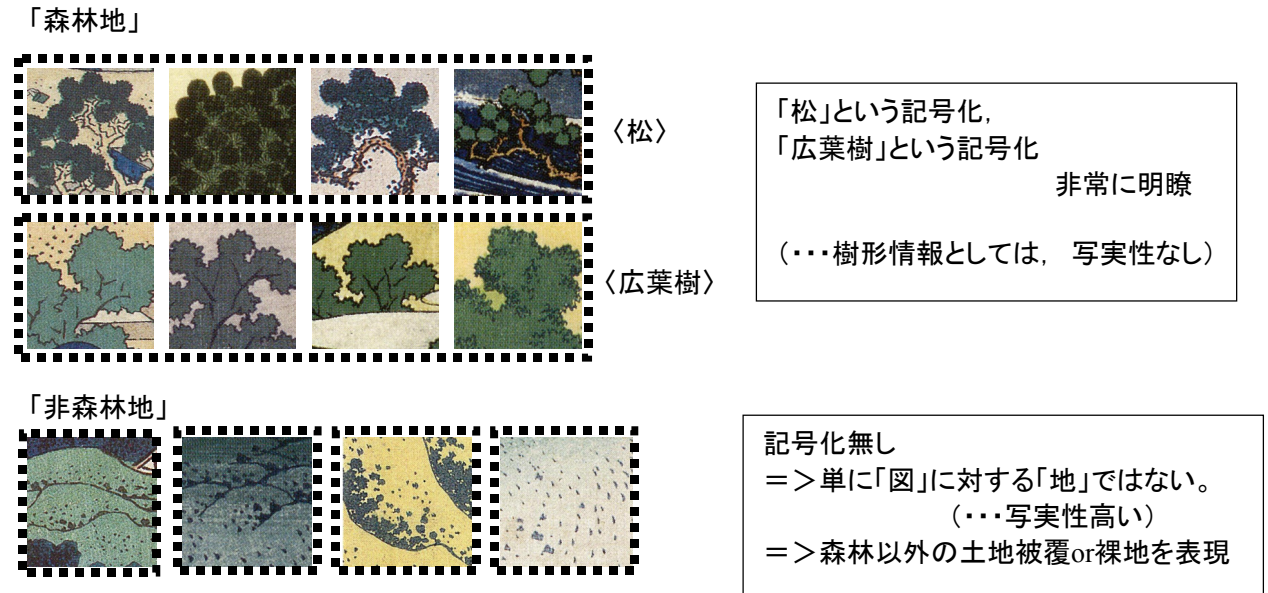
まず、①浮世絵における山肌の表現が記号化しているかどうかについて検討した。「富嶽三十六景」（1831～1835）全 46 枚の同作品から山肌表現部位を抽出し整理分類して記号化の有無を検討し、既刊の絵手本と比較した。

風景画の写実性については、山肌の表現以外にも、地形の幾何学的なデフォルメ、遠近法からの逸脱、複数視点からの描写の合成、仮想視点への変換なども、写実性を歪める例として指摘できるが、本研究においては、山肌の表現に考察を絞った。②浮世絵の山肌表現と明治期の旧版地図上の地図記号との対応を調べるため、地形表示ソフト「カシミール」を使用して 3 d 表示した地形図に浮世絵と同様の幾何学的デフォルメや視点の移動などを施し、描かれた山地斜面の位置を地形図上に同定し、地形図上の地図記号の植生と対比した。

旧版地図の凡例にある「篠地」は花崗岩地帯の「はげ山」とは異なる。ともに森林に覆われていないが後者は甚大な土砂流出を伴いその緑化は容易ではない。浮世絵に描かれた「はげ山」のような表現が篠地である可能性もある。そこで、③関東で当時描かれた蘭画や真景図、古写真など比較的写実性の高いとされる資料を対象に、森林に覆われていない山肌が篠地か「はげ山」かを調査した。

4. 結果と考察

①山肌表現の記号化について：遠景の山肌表現は空気遠近法により不鮮明に描かれ樹冠も省略されることが多いため、「富嶽三十六景」の 46 作品から中景・近景の山肌表現を抽出した。マツ林と広葉樹林は描き分けられていたがそれぞれ明瞭な記号化が認められ、樹形情報としての写実性なかった。一例を図 1 に示す。非森林地は中景 13 例、遠景 22 例の表現を抽出したが、顕著な記号化や絵手本との類似は認められないことから、単に「図」に対する



図－１ 葛飾北斎の「富嶽三十六景」から抽出した山肌表現の例と記号化の状況

「地」ではなく、森林以外の土地被覆あるいは裸地の存在を表現したものであり、「山肌の荒廃の空間分布状況に関する情報」として有用であることが明らかとなった。

②旧版地図との対応について：浮世絵「甲州三坂水面」および「相州箱根湖水」における森林地と非森林地の分布を旧版地図（明治 29、谷村、山中湖、甲府、富士山）および旧版地図（明治 29、松田惣領、小田原、山中湖、御殿場、富士山、大宮）と比較した。浮世絵における非森林地は旧版地図では「篠地」に分類されていることが判明した。なお小椋（1996）によれば 明治中期・関東では地図記号の「荒地」「篠地」は、ともに「篠原」であり「はげ山」ではない。浮世絵と旧版地図とは数十年のタイムラグがあることに留意し、当時の緑化技術レベルではこの間に「はげ山」が森林化することは難しいが、「非森林地」が「篠原」であると仮定すると可能であること、またこの間の社会情勢を踏まえれば森林が荒廃地化することは十分あり得ることに留意すると、浮世絵の山肌表現と地形図の地図記号の空間分布はよく対応することがわかった。

③他資料による篠地と「はげ山」の状況：花崗岩地帯のような激しい土砂流出を伴う「はげ山」や表面侵食を描いた絵画や版画、古写真はこの地域については得られず、篠地や草地の例は多く入手できた。老中松平定信が海防情報収集を目的に谷文晁に描かせた「公余探勝図」の一枚には 100m オーダーの長さと思われるガリが山肌に描かれた絵があったがその周囲は篠地か草地であり、ガリ下流の溪畔にも不安定土砂の段丘などは描かれていなかった。

5. まとめ

葛飾北斎の「富嶽三十六景」46 枚を対象に近世後期の山地荒廃状況を検討した。まず① 山肌表現の写実性については、「非森林地」において顕著な記号化は認められず、荒廃状況の情報として有用であることが判明した。そこで② 荒廃状況の実態を把握するため「浮世絵の山肌表現」と「明治時代の地形図の地図記号」を対比し、土地利用毎に 60 年の変遷のシナリオを考慮して検討したところ、「山肌の荒廃の空間分布状況に関する情報」として有用であることが明らかとなった。さらに③ 他資料の山肌表現を探索しても、一面の土砂流出を伴う山肌表現は、この地区では見当たらず、「はげ山」のように描かれた山腹は「篠原」であり、土砂流出は伴っていなかったと考えられた。

参考文献

- 永田生慈（2000）葛飾北斎．吉川弘文館，東京．pp.225
 小椋純一（1996）植生からよむ日本人のくらしー明治期を中心にー．雄山閣，東京，pp.247
 太田猛彦（2001）日本の緑の変遷と緑化の評価．砂防学会誌「新砂防」，54(4)，107-111.
 太田猛彦（2008）森林の変遷と現代の森林” 荒廃”．水利科学 No.304（52 巻 5 号）3-26
 田中淳夫（2008）愛知県海上の森大学開講式記念講演 <http://goodnews-japan.net/news/cop10/2008/07/15/418>
 田中隆文（2008）環境問題はイメージでは解決しない。ーステレオタイプに惑わされないための水土保持学講義ノートー．ブイツーソリューション，名古屋，pp.126
 田中隆文・木村正信・近藤観慈・岡本 敦（投稿中）木曾川水系中津川流域 406 年間の災害発生と土砂動態．砂防学会誌

キーワード：山地荒廃，はげ山，江戸時代，葛飾北斎，写実性

（連絡先：田中隆文 takafumi@agr.nagoya-u.ac.jp）